

連を基軸にしたものであり、特殊日本の家の構造的性質を解明するために、先祖の問題が取り挙げられてきた。しかし、ひとつには、家が解体している現代日本社会において先祖祭祀は根強く実修されていること、またひとつには、「先祖祭祀文化圏」ともいってもよい東アジア諸社会においても変容しながらも維持されていることを考えると、家の枠組に視野を限定してとらえることに限界があるといえる。先祖祭祀のひとつの現出形態として家先祖祭祀を把握すべきであろう。

家先祖祭祀は先祖の加護と、それにたいする報恩という社会統合的機能が偏重して説かれていった。それは家族国家観における祖先尊崇が「国民道徳」として学校教育、社会教育の場において国民教化されていき、先祖祭祀の範疇とされていった。そのことによって先祖祭祀を怠ると子孫に不幸がもたらされるとか、先祖の行為が子孫に受け継がれるといった災因論としての側面、あるいは、死者がホトケになるといった民俗仏教との融合した世界は等閑されていった。それが先祖祭祀研究に反映していったといえる。

さらに東アジア社会を「先祖祭祀文化圏」ととらえて検討した場合に、始祖、先祖が生命の本源と観念され、都市化、産業化社会された社会においても根強くその儀礼が実修されているといえる。そうした側面は日本社会においてもあてはまるといえる。すなわち日本人は死者をも含めて他者との関係のなかで成長し、安定すると観念されており、その自己の存立根拠を打ち立てる拠点となる重要な他者として先祖が立ちはだかっているといえる。

家族国家観の登場と先祖

孝本 貢

The concept of the family-nation and ancestors

Mitsugi KOMOTO

本年度は戦後における先祖祭祀研究の研究枠組の再検討を試みた。国立歴史民俗博物館共同研究『日本における基層信仰の研究』に参加し、そこで「先祖祭祀・祖先崇敬・先祖供養」というテーマで報告した。また、コペンハーゲン大学で開催された第7回ヨーロッパ日本研究会議において「先祖祭祀と現代日本社会」というテーマで報告した。

先祖祭祀に関する既存の研究枠組は家構造との関